

近年、男性が発症するがんの中で急激に増加している前立腺がん。初期段階では自覚症状がほとんどなく、進行も遅いために気付かないケースも多い。進行すると「尿が出にくい」などの症状が現れ、さらに進むと骨に転移する恐れもある。正確な診断には針を使い組織を採取して検査する「前立腺針生検」が欠かせない。KKR高松病院（高松市天神前）は、事前に撮影したMRI画像と生検中の超音波画像を組み合わせ、がんが疑われる部位を正確に捉えて組織を採取できる最新の先進医療機器を導入した。西日本初の先進医療の認可施設で、全国では6番目。4月から検査を開始し、これまで3例を手掛けている。

## 前立腺がん検査に最新機器

### ■不安をなくす

前立腺がんを早期に発見

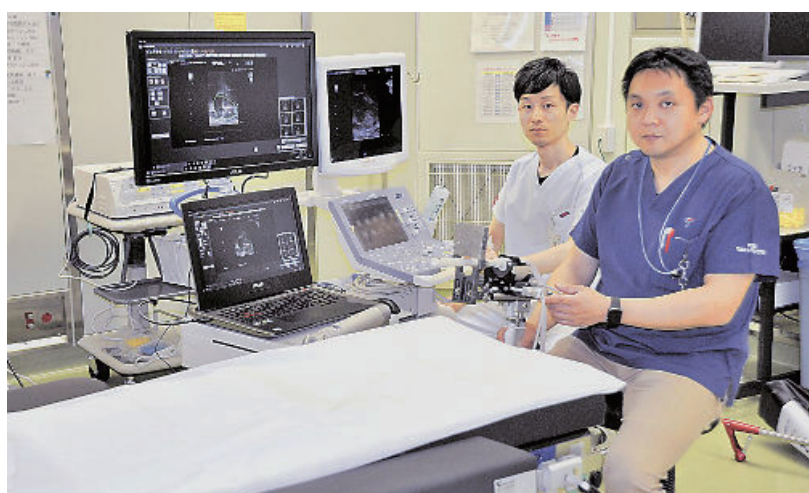
するため、腫瘍マーカーであるPSAの血液中の量を測るPSA検査がある。一般的には血液中のPSAは基準値（4ナノグ/ミリリットル）以下の量であるが、前立腺に疾患があると、数値が上がっていく。ただ、この検査だけでは良性の前立腺肥大症や前立腺の炎症との区別

# 医療 新世紀

がつかないことがあり、正確な診断のためには、針を使って前立腺の組織を採取し、悪性の有無を調べる必要がある。

# 部位正確に把握し、負担減

## KKR高松病院 西日本で初導入

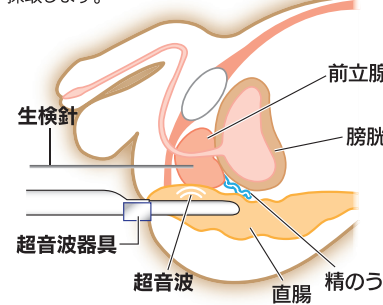


前立腺がん検査の最新機器の操作方法を確認する泌尿器科の岡添医長（右）ら—高松市天神前、KKR高松病院

### 最新機器を用いた針生検のイメージ

### 前立腺針生検

前立腺針生検では、直腸から超音波を当てながら前立腺の正確な位置を把握し、細い針で組織を採取します。



が高いが、がんが見つからず、毎年針生検を受けている人が多くいる。1回の検査で正確な診断がつけば、がんを早期に発見でき、肉体的な負担や不安もなくせよ」と力を込める。

### ■立体的に表示

同病院が導入した最新の検査機器は、MRI画像とリアルタイムの超音波画像を組み合わせ、モニター上に立体的に表示されるのが特長。前立腺は緑色の線で、がんの疑いのある部分は赤い線で囲まれて表示される。モニター上には5ミリ単位で座標軸も映し出され、医師は赤く囲まれている部分の座標軸に向かって針を刺すことで、狙った組織を確実に取ることができる。

### ■小さな病変も

小さなサイズの病変でも見逃さずにチェックできるのも大きな特長だ。これまでの検査方法では病変部が1センチ程度の大きさにならないと針が当たらずにがんの発見が難しかったが、この機器によりMRIでがんが疑われる部位をリアルタイムに確認し、針を刺すことができるため、病変部が5ミリ程度の大きさでも発見できるようになった。

がつかないことがあり、正確な診断のためには、針を使って前立腺の組織を採取し、悪性の有無を調べる必要がある。

に差があった。最新機器では、MRIでがんの疑いの強い部分を見極め、超音波画像と融合できるため、狙った組織を正確に採取することができる。泌尿器科の岡添医長は「PSAの値

これまでの検査と比べ検査時間は10分程度長くかかるが、検査後はこれまでと同様に翌日には自宅に戻ることが可能だ。

R Iを撮影せずに8〜12カ

の経験によりがんの検出率

科（087（861）3261）。